

氏名	地村 洋平
ヨミガナ	チムラ ヨウヘイ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第481号
学位授与年月日	平成27年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 熱による造形 一固から溶・溶から固へ、ガラスと金属を通して— 〈作品〉 Herald

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	藤原 信幸
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	桐野 文良
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	赤沼 潔

（論文内容の要旨）

本論文のタイトルにある「熱」とは、筆者の表現活動に用いる素材、ガラスと金属に対して重要な役割を果たすものである。かつて、筆者は金工の中の1つ、鋳金研究領域の修士課程を経ている。鋳金（鋳込み）では、主に金属を熔解するための熱の流れが存在する。また、現在在籍する、ガラス造形研究領域では、ガラスを加熱し、その粘性を調整することで様々な加工を行う。

そこで、ガラスや金属といった素材の違いによって、それぞれを分類するのではなく、素材に流動性を持たせる「熱」を主題とすることで、新たな位置づけができるのではないかと推測した。また、「熱」を主題として、ガラスと金属について研究する中で、「ガラス内金属鋳造」といった、筆者独自の技法の発見に至る。

本論文は、鋳物からガラス造形への転換に伴い生まれた、「ガラス内金属鋳造」を用いた提出作品、《Herald》の制作及び思考過程と、その結果について述べるものである。

論文の構成は以下の通りである。

第1章

「ガラスと熱」では、ガラス造形と熱について述べる。天然ガラス（黒曜石など）を除き、我々が日常的に目にする、窓ガラスやガラスコップ、あるいは美術品として使われるガラスは全て人工物である。そこで、人類のガラス発見の歴史と、本論文に関係する重要な出来事、あるいは東京藝術大学のガラス研究の歩みなどを中心として、ガラスの歴史について言及する。さらに、ガラスの基本的な技法について、「熱」を主題として特徴づけていく。ガラス造形における、熱を使う仕事には、主にホットワークとキルンワークがあり、熱を使わないものにはコールドワークがある。そして、熱を使うものと使わないものとは、完成品に異なる魅力があると論じ、これをヒートワークとコールドワークとして特徴づける。ホットワーク及びキルンワークの作例、コールドワークの作例については、歴史的作品の紹介に加え、筆者制作の作品あるいは他者による作品を例に挙げて説明する。

第2章

「金属と熱」では、金工と熱について述べる。第1章と同様に、歴史的作品の引用や、筆者制作の作品について言及し、「金工と熱」について考察を図る。その中で、彫金や鍛金で扱う「熱」と比べて、成形時に「金

属に流動性を持たせる」といった工程を踏む「鑄金と熱」の関係は、特異であると位置づける。また鑄金は、筆者にとって最初に制作を始めた技法である。その鑄金には、金属を熔解するなど、熱を使って成形する様々な技法がある。鑄金で出来上がる作品には、彫金や鍛金といった、金工内の他の技法で出来上がった作品と比較すると、異なる魅力が存在すると論じる。また、鑄込みにおける神聖な空気感は、表現活動の概念に影響を及ぼす部分であり、制作の途中段階、あるいは火にまつわる祭事などで感じ取る「熱による何か」についても言及する。湯面や鑄肌など、鑄金独特の金属の表情を知り得た経験は、本論文の主題「熱による造形」の核に当たる部分といえる。

第3章

「熱を主題として」では、本論文における「熱」について述べていく。現在では、熱の流れを生み出すものとして、「ガス」や「電気」が主流であり、ガラスや金属を加熱し、溶かすといった作業もまた、これらの燃料を必要とする。素材の反応は、熱源となる燃料の種類によって多少の差を生じる場合があるが、本論文の主旨である、「熔解」といった目的に対して、その差はないと結論づける。しかし、火と人類との関わりは古く、現在でも神話あるいは宗教において重要な役割を果たすことから、火の種類がもたらす、精神的な作用は異なると位置づける。また、第1章、第2章の内容より、各素材における「熱」の特異性から、その共通性を見出していく。その中で、素材が熱によって流動性を持つことや、それを受け止める鑄型の存在が、筆者の制作において重要な部分を占めることについて言及し、ガラス造形及び鑄金による造形の、双方に共通する「鑄込み」について考察を図る。加えて、「熱」による素材の変化に伴い、重力、表面張力など人為的な力とは別に、素材に働く力について言及する。

第4章

「ガラス内金属鑄造の作品化」では、この独自の技法による作品を軸に、話を進める。この技法の発見には、ガラスならではの光を透過する性質を利用した造形感覚や、第3章で言及した、「熱」のもたらす、人為外に働く力の利用が関係していることについて述べる。「ガラス内金属鑄造」の技法的内容にも触れ、現段階での研究の成果及び、今後の課題について示唆する。また、これまで述べてきた「熱」の作用によって影響を受ける、精神的な部分を核とした始まりの実験シリーズ（提出作品のシリーズ名）のステートメントについて言及し、技法と主題が揃うことで、始めて作品としての価値が生まれるモデルとして、これを提示する

終章

ガラスと金属といった2領域の素材を用いることで、あるいはホットワークや金属鑄造の経験により、「熱」がもたらす造形について思案し、新しい技法の発見に到達する。新技法「ガラス内金属鑄造」は提出作品《Herald》（始まりの実験シリーズ）として1つの答えを導くことになる。しかし、これはあくまで制作活動の1つの点であり、考えの更新が成されることが不可欠であると述べる。また筆者は、ガラス造形や鑄金による作品の一部の領域を「熱による造形」として捉えることは、単に美術工芸が素材として分類されるだけではなく、新たな主題を得ることで、新境地へと進んで行くと論じ、今後の工芸や美術の展望へと考えを漸進し、結びとする。

（論文審査結果の要旨）

論文は、素材としてガラスと金属を取り上げ、その2種類の素材を融解し『熱による造形』により新たな表現技法の確立を目指した経過をまとめたものである。はじめに、素材としてのガラスと金属それぞれについて造形面での特徴（類似点と相違点など）を発表作品から探り、明らかにした。ガラスと金属の造形の共通するところとして熱を用いる点として捉えている。熱は神聖な存在として捉えられる半面、エネルギーの一つの形態として物理的には見られている。やはり見えない存在であることが神格化の原因と考えられるが、このエネルギーの流れによる造形には熱といかにうまく付き合うことが大切であるという結論に到達した。このような状況を背景に、ガラスと金属のそれぞれの素材の特徴の融合を試みる新たな芸術表現の創生を目指す

した挑戦を《始まりの実験》と題しておこない、それに成功している。この発案から実現までの一連の検討がまとめられている。材料学的には融点と熱膨張率が近いことが有効と考えがちであるが、『ガラス内の金属鑄造』という結論は材料学のこれまでの常識を越えた新しい技術であり、新たな芸術表現であると評価できる。一つの見方として鑄金とガラス造形の融合で新たな分野を切り開いたと言っても過言ではない。さらに、本論文では金属とガラスの芸術的な融合により新たな工芸分野、あるいは工芸といった分類を越えた新たな芸術分野を創成する可能性を秘めていることも明らかであり、まさに、《始まりの実験》を起点に発展していくことが期待できる。

以上のことから、本論文は考察であり、それを実現した作品との対比により博士(美術)の学位を授与するのに相応しい論文であると判断する。

(作品審査結果の要旨)

申請者は、学部、大学院を工芸科の鑄金で学び、その後富山ガラス造形研究所を経て本学工芸科のガラス造形において造形を探究し今回の発表となったが、数年前から自らの経験をもとに金属鑄造とガラスとの接点を考え、「ガラス内金属鑄造」に至る過程は、創造するという積極的な熱い気持ちの成果と言えよう。この独創性と発想の柔軟性は特筆できるものである。また、今回の発表作品においては、この「ガラス内金属鑄造」にこだわって局所的な表現となることを避け、熱というキーワードのもと、造形の枠を多様化し魅力的空間を創り上げたことは評価できる。ただし、異なった視点から見ると、「ガラス内金属鑄造」による造形に関してはスタート地点に立ったところといった印象が残り、「ガラス内金属鑄造」の効果的な表現方法を獲得しつつあるが、よりダイナミックな表現の展開を今後期待したい。

申請者は、鑄金在籍時の卒業作品と修了作品において壁面を使用した独自の発表を展開していた。特に修了作品においては、当時の上野公園に張り巡らされていたホームレスのブルーシート（パブリックブルー）をモチーフとしたアルミ鑄物での壁面表現で、ソーシャルプラクティスの内容を含んだものであった。今回の博士審査展での発表は、壁面と床面の関係とガラス素材の透明性、「ガラス内金属鑄造」の金属、鏡を効果的に使用し、清潔感のあるクリアな場に変換した。個々のガラス表現も多彩であり、形状に関しては、作意を持たない表現に腐心し、その表現が「始まりの実験」として新たな世界を生み出す目的のもと現実社会にある大きな力を捉えようとする試みは、修了作品と通ずるものがある。今後のさらなる展開を期待したいが、現状の提出作品の内容について上記内容から高く評価するものである。

(総合審査結果の要旨)

ガラスと金属、という二つの工芸素材の持つ特性を「熱」をキーワードに、新しい視点と解釈を持って従来のカテゴリーにとらわれない立場にたち作品制作と考察を行っている。

ガラスの粘性、金属の流動性、それらと熱の関係を考察しつつ、古来より伝えられた鑄造という技法を、表現の手法として捉えなおそうとしている。その結果、新しい可能性を持った表現方法が見つけれ、それは技法として確立されつつある。その技法の発見から提出作品の完成までの経緯を述べつつ、その技法の持つ意味を、考察したのが本論文であり、実践として提出されたインスタレーションおよびオブジェが作品である。

作品において、新たな技法としての「ガラス内鑄造」をさまざまな角度から試み、その技法的な広がりをも、「Herald (始まりの実験)」として力強い空間にまとめ上げた。

本作品および論文は、鑄造における作品と鑄型、ポジとネガを主従の関係ではなく同じ表現要素として捉え、それぞれの可能性、特に鑄型の可能性に再注目した。それは、ガラスという光を透過する、透明な物質特性と、低融点で溶解する金属「錫」の特性を見極め、金属とガラスという、異素材の比較を通して見えてくることを、直感的な感想とその分析を通し、新たな知見を得ようと思いを進めていく。

本論文は、実技系博士課程論文の持つ役割であると考えている「造形並びに芸術表現活動を、作り手として言語化し、わかりやすく社会に対し広く伝播する」という使命がなされている。例えば、「火や炎に関する

記述」において語られる、東京芸術大学鑄金研究室に伝わっている事柄、「鞆祭り」や「あと吹き」をはじめ、古から伝えられた事柄を、民俗学的な考察を加えながら論じている部分が興味深く、本論文の魅力の一つとして捉えた。

自身の制作を通した実感を持った体験により書かれているところが、読み手に新鮮な共感をもたらし、一部に独断的であり、考察が十分深められていない点、読み切れていない分析も感じられるが、そこには作り手としての新しい感覚で新たな表現を未熟ながらも希求する姿勢も読み取れる。

本発表は、美術領域における新しい工芸の枠を広げる内容であり、これからの継続的な探求を期待させる、一つの節目となる作品と論文であると評価できる。